

④ 俗語・卑語、その他注目すべき表現について

片 桐 須美子

ここでは、女子中高生という世代、及び集団に特徴的な表現のうち俗語・卑語と感動詞を取り上げる。渡辺友左は、いわゆる俗語・卑語を〈スラング〉として次の二つの機能に重点をおいたことばとして定義している。（『隠語の世界 —— 集団語へのいざない —— 』1981年）

- (1) 集団の成員がそれをつくって楽しむ。さらに成員同志がそれを使って楽しむ。つまりスラングとは集団の成員にとって、つくる、そして使うという遊びの機能をもった集団語である。
- (2) 集団の成員同志がそれを使うことによって、相互の連帯感や親愛感を確認し強化しあう。つまりスラングには集団の成員同志の心理的な結合を強化する機能がある。

小論でいう〈集団〉とは、無論マンガに登場する女子中高生が相当する。その仲間うちで使われ、その仲間を離れた〈ソト〉の世界では通常用いないであろうことばを拾ってみる。但し、扱う対象の枠は次のA～Cとする。

- (A) 語そのものが〈集団〉を特徴することばであるもの
- (B) 語そのものは標準的な語として〈ソト〉の世界にも存在するが、そのままの形で用いられていないことに特徴があるもの
- (C) 標準的な語による表現の語順を変化させて、一見全く意味を成さない形で示したもの

もともとは(B)に属すると考えられるものも変型が著しく一見してもとの語が類推しにくいと思われるものは(A)に分類した。また、(B)では語形の変化の生じているもののみならず、変形を生じてはいないが運用の仕方が本来の用法と著しく異なると考えられるものをも扱った。従ってBの「そのままの形では用いられていないもの」とは、語形の面と運用の面との両義を含む。

1. 俗語・卑語〈スラング〉

〈表1 俗語・卑語 (A) 〉

作品番号	語	意 味
0 2 8	ダ チ 友 達	友達
0 2 9	ダサイ	あかぬけしない 田舎くさい
	ブタカバン	膨らんだカバン
0 3 0	ブーイング	口々に不満を唱えること
	口パク	口をパクパクさせてさも歌を歌っているように見せること
0 3 4	いがった	よかった
	いかんが	いけない
	ア ー バ ー 躁状態	ばかげた躁状態(パアの逆さことば)
	スチャラカな (ポーズ)	見苦しい あられもない
	ざけんじゃねえ	「ふざけるんじゃねえ」の略 冗談言うな ばかなことを言うな
0 3 5	ケツ字	お尻を振って文字を描いてみせる こと (懲らしめとして)
0 4 5	たじ…っ	たじろいでいることを表す感動詞
0 4 6	コケかた	転び方
0 4 7	ラッキーでもカンでもない	幸運なことでも何でもない
0 4 8	さ てん 茶 店	喫茶店
0 4 9	やんきー	アメリカの人のような軽い調子の 良い若者
	自 販	自動販売機の省略形
0 5 2	イマイチ	いまひとつ
	マ ジ	真面目 本当
	好きっばい	好意を抱いていると思われる様子
0 5 0	け つ	尻

0 5 3	ブ ス えっち	醜 女 性的なことがらを人前で口にしたり行為したりすること
0 5 4	ヤバイ	危ない よくない
0 5 6	ボケナス ミーハーギャル	ばか あほう 程度の低いことにうつつを抜かす若い女性のこと
0 5 7	スケベヤロー 大ボケやろー やばーっ スケベ エッチ	好色のはげしい男 大ばか者の男 ヤバイ (0 5 4) に同じ 好色のはげしい者 えっち (0 5 3) に同じ
0 5 8	タソガレル	悩み憂えている
0 5 9	スケコマシ	複数の女性を口説く男
0 6 2	ホンマ ガ キ ぐさぐさくる	「本当」の意の関西弁 子供 (相手の批判が心に) ぐさぐさ突きささる
0 6 8	しゃない う え 名 字 なしたの	「仕様がない」の転 名 字 「どうしたの」の意の関西弁
0 7 5	エッチ ロリコン パーロー うっす	(0 5 3, 0 5 7 既出) 「ロリータコンプレックス」の略 ばか 真抜け 挨拶語「オス」の転
0 7 6	グレる 事故る	不良化する 脱線する 事故をおこす
1 0 8	ゲーセン ハイ	ゲームセンター 高揚した気分
2 2 5	ギンギンに (攻める)	一生懸命に手をつくしている様子
2 5 4	うっしっし	楽しみ喜んで居る状態をさす

語そのものが＜集団＞を特徴すると思われる語は、＜表1＞に見られる通り、全4627談話中延べ語数にしてわずか49語出現するにとどまる。異なり語数にして46語である。いずれも特別斬新なものは見当たらず、新語・流行語とは言えない、むしろ俗語・卑語としては比較長く命脈を保ち一般化しているものが多く見受けられる。

『隠語辞典』（東京堂出版 1956年）は俗語を含む広義の隠語を対象としているが、49語中次の9語がここに確認できる。（ ）内はそこに示される語類の別を、□内は時代の別を表す。

だち〔達〕（盗）因／さてん〔茶店〕（俗）囧／エッチ（女学）囧／やばい（盗・香具など）囧／ぼけなす（盗）因／すけこまし（香具）因／すけべえ（俗）囧／がき（俗）囧／ぐれる（香具）囧

囧、囧、因、囧はそれぞれ江戸、明治、大正、終戦後の各時代を表すが、「茶店」・「エッチ」を除きいずれも大正以前の古い語である。「変態」のローマ字書きの頭文字をとった「エッチ」にしてもさほど新しいものではない。昭和27年、舟橋聖一の新聞小説に用いられて以来流行語となったが、女子学生の間では既に隠語として用いられていたという。いずれも長く命脈を保ち、一般化し、本来の隠語としての性格を失うにつれて語義も本来のそれよりやや消極的となり緩やかな使われ方をするようになっている。例えば「エッチ」は先に記した通り「変態」が語源であるが性的なことがらを口にするだけでも用いられ、また女子学生のみならず男子生徒にも使用されるようになってきている。また、「スケコマシ」にももはや「女を買う」意は、少なくとも若者の用語には認められない。「スケベ」も「好色のはげしさ」がそれほど感じられなくとも「エッチ」のほぼ同義程度にも用いられる。いずれも少女マンガの題材が異性にまつわるものが多いことを背景として出現している。

そのほか表現に見られる特徴を整理してみると、以下のようになる。

①関西弁・東北弁など方言による表現の語感を楽しんでいるもの

- ①縮 約 形 : いがった、ホンマ、なしたの
- ②縮 約 形 : 自販、イマイチ、マジ、しゃない、
ゲーセン、ざけんじゃねえ
- ③外来語に基づく語 : ブーイング、ヤンキー、ロリコン、ハイ
- ④〈動詞〉+「ばい」、〈名詞〉+「る」による新造語
: 好きっぱい、タソガれる、事故る

この〈名詞〉＋「る」による動詞化は若者の造語の常套手段であり、古く戦時中からその例を見ることができる。しかし、1980年前後の若者の流行語に多く見られた、「エガワる」「タブチる」など〈人名〉＋「る」が一例もみられないことから、その隆盛は落ち着きを見せたようにも感じられる。

また「動詞」＋「ばい」による形容詞化は「名詞」＋「い」による形容詞化「ナウい」「イモい」などととも70年代後半よりたいへん盛んになってきたものではあるが、「好きっばい」という使用例は従来とは、運用の仕方に違いが認められる。言うまでもなくこの形容詞化は「…のような」、ある状態や傾向を帯びていることを表すが、「好きっばい」は「人に好意を抱く傾向を帯びている」という意ではなく「(相手の男性が)自分を好いているらしい」程度の意である。断定的な物言い避ける一つの例かと思われる。

- ⑤擬態語の擬声語化 : たじっ(たじたじ)
⑥擬声語の擬態語化 : うっしっし(会心の笑い)
⑦ことばそのものの意味に独特のニュアンスが付随して使用されるもの : 口パク、やってろ、ブタカバン

ロパクは口をパクパクさせて実質的な歌唱力が伴わないことを批判する意を含む。「ブタカバン」はブタのように太ったカバンの意であるが、それを醜悪なものとしてとらえており侮蔑の意を含む。これらはいずれも対象への批判が込められていることから逆に芸術的な面での実力や外見のスマートさに対する美意識・志向性をうかがうことができる。

〈表2 俗語・卑語（B）〉

作品番号	語	成り立ち ・ 意味
034	痛ってえ 危ねー ～じゃねえーか すっげー 当て逃げ野郎 オカマ野郎	長音化 [a i] → 「エー」 " " " [o i] → 「エー」 当て逃げをした男性に対する称 男色の相手を思わせる、いかにも女性的な話し方をする男性に対する称
045	（噂が）ぶっとんでた	接頭語「打つ」＋「飛ぶ」の音便形
049	たまってる	集まりたむろしている
053	めちゃくちゃ めっかる	程度の甚しいことの形容で、優れたものにも用いる（滅茶苦茶） 「見つかる」の転
050	おんなし あんまし みして	「おんなじ」の転 「あんまり」の転 見せての転
054	汗なまった	汗まみれになった
057	こねー ちがうくないか すっげー	長音化 [a i] → 「エー」 違はないか 長音化 [o i] → 「エー」
058	やってろ	勝手にしている
070	気に入くわねー	長音化 [a i] → 「エー」
072	聞きてえー	"
076	こえー	"
107	あんまし きょわい	「あんまり」の転 「こわい」の転
108	バッチシ 濃ゆい	「ばっちり」の転 濃い
230	サイッテー	「最低」の転

ここでも特に目新しいものは見つからない。女子高校生の「○○だしい、○○だしい」という、句末で特に「し」を間延びさせた言い方をする傾向とイメージの重なりを感じずるものであるが、語末の「り」や「じ」を「し」と表現する「おんなし」「あんまし」「ばっちし」などが目に付く。また顕著な傾向として「こねー」「すっげー」といった文末の連母音〔a i〕・〔o i〕が「エー」となる長音化が認められる。この語は実際によく耳にするが、小論で取りあげたマンガにおいては特定作品の特定の人物の使用に限られ行動的な女の子を描く時に、その特徴を示すものとして用いられる。

特異な造語法として、〈形容詞連用形〉＋「ない」という表現の転用と思われる、「違うくない」の〈動詞終止形〉＋「くない」が挙げられる。

〈表 3 俗語・卑語 (C)〉

作品番号	語	意 味
075	クリソツ	ソックリ

隠語を作る一つの手法でもある語順の逆転による語。意味を変えることなく用い、その語感を楽しんでいられる。

2. 感動詞

〈表 4 感動詞〉

表現内容	女 マ ン ガ	男 マ ン ガ
驚 き	あ／あっ／あっ？／あ…／あ、あ、あっ あちゃー あら／あらあ…／あれっー うおー／うけー／うじゃっ／うひゃー え／え？／え!?／え…／えー／ええ／ ええ!?／ええっ!?／えーっ／ええーっ きゃ／きゃっ／きゃああ／ キィーッ ゲッ／ゲエー／げーっ しょえー	あっ うわ!!／うわァー えっ／えっ!? えー／えーっ キャー／きゃーっ はっ ひゃーっ へーっ

	でえーっ／でひーっ は？ ひいっ／ひゃーっ／ひえーっ ひゃー／ひゃーっ／ひえ へ？／へっ／へっ わ／わー／わあ！	
喜 び	るん わーい	
怒 り	ぐそー ちっ／ちえーっ	
苦 痛	つっ（痛） ふぎゃ	
悲 し み	ああ	
動 揺	あわあわあわ（あわてている） たじっ（たじたじとしている）	

覇岡昭夫の「漫画の語彙（『講座日本語の語彙』1982年）」によると少年少女マンガと日常会話における品詞別比率はほぼ同率としている。が少年少女マンガにおける品詞率が日常会話よりも上まわっているものをみると、名詞、感動詞、形容動詞、連体詞の四品詞がそれぞれ 7.1%、0.9%、0.4%、0.2%の割合で上まわっている。名詞に次いで感動詞が日常会話より上まわっており、日常会話がマンガに写し取られた場合の一つの特徴としておさえられよう。また、同論中で「漫画すべてに共通しているのは新鮮な、あるいは珍妙な擬声（音）語・擬態語である。」として、驚きや笑いを表す語を挙げている。

〈表4〉に見られる通り、少女マンガの会話内に見られる感動詞は多種多様であり、特に驚きを表す語は多い。また同一の語とみなされる語であっても発音やニュアンスの差をできるだけ表そうとするために表記方法が多彩で、促音の付いているもの、感嘆符、疑問符、長音記号等の付いているものをそ

れぞれ別の語とするとほとんど登場するすべての用例が別の語と認定されてしまうほどである。

この感動詞においても、いわゆる従来 of 女性らしいとされる語は「あら」「あらあ…」「きゃ」「きゃっ」「きゃあ」の類にすぎない。多彩ではあるが、それだけに対象への感動を言葉に表現する労力を避け安易に擬声語化する傾向もあるのではないかと思われる。

まとめ

現代 of 女子中高生のことばを特徴づける〈スラング〉というものはかなり多く存在し、従って意味を理解するのが困難なものが数多く出現するのでは、という予測に反し、比較的俗語としては古く、一般化したものが多く登場した。従って女子中高生特有の語というよりはむしろ、性差を超え、世代の幅を広げ、〈若者のことば〉としてとらえるのにとどめた方が適当かと思われる。この点に関しては鶴岡が樺島忠夫の「少年・少女マンガ週刊誌の言葉」の調査をもとに指摘した「（隠語・俗語は）ほとんど目に付かない」という点に通ずる結果となっているものと思われる。（『講座日本語の語彙』——「漫画の語彙」1982）

これは今回調査対象 of マンガが女子中高生を中心とする読書層を想定しているにせよ、不特定多数 of 読者の目に触れることを考えると小さい集団内で用いられる語や、あまり一般に広まっていない新語は避けられる可能性があるということと、何より、女子中高生が仲間うちで〈スラング〉として用いている語 of マンガ作家 of 取材の限界がその原因として考えられるであろう。

〈スラング〉及び感動詞の一覧を見て共通して言えることは、従来言われているようないわゆる女性らしいとされる表現・言葉が全くと言ってよいほど認められないうえ、作家・作品に程度の差こそあれ男ことばとの差異が感じられないということである。この点については、女子中高生の言葉づかいが荒い、ぞんざいであるなどという巷での評判を、裏づけるものではある。しかし、女子高校生と日常接する機会を多く持つ筆者には、時々耳にする彼女たちが仲間うちで交わす会話の実態よりは、マンガに現れる表現はやや控

えめであるという印象を受ける。実際、仲間うちで使う言葉の例を挙げても
らったところ、ある4人の仲良しグループでは、その仲間うちで毎日のように
新しく造られる語があり書ききれないと感想をもらした女子生徒がいた。
実際の会話においては、はるかに新奇・多彩な弾力的に運用される〈スラン
グ〉の存在が想定されよう。

—— おわりに ——

マンガにおける女子中高生のことばが、従来のいわゆる女性語といわれたものの範囲にとどまらないことは予想どおりの結果であった。文末表現においては男性専用とされる「だぜ」「だぞ」禁止を表す「な」の使用などが見られ、男性的な言い方とされる「だよ」なども多用されている。敬語に関しては尊敬語・謙譲語の使用がきわめて少なかった。また男女の友人を呼び捨てにする例なども目立ち、一般に女性のことばは丁寧であり、敬語の使用が多いと言われる通説に背く結果となっている。縮約表現も多く、また一語文や、修飾句をもたず単語（主語・述語）をならべただけの文も目立ち、全体的にマンガの女子中高生は非常にくだけた、直截な表現を用いているとの印象を得た。これは、マンガにとりあげられた会話のほとんどが、親しいものどうしの日常的な会話であることにもよるだろう。少年少女マンガにとりあげられる世界は存外狭く、SF・時代物など（今回はこれらを調査対象とはしなかった）を別とすれば、ほとんどは学校やその周辺を舞台とし、親しい友人間や恋人たちをめぐる問題を題材としているといっても過言ではない。

さてそのような限られた日常語の世界のことではあるが、女子中高生のことばが「男ことば」化しているという傾向は明らかにあるといってもよい。これに対しては「ことばの乱れ」として批判する目もある一方で、先にあげた高崎のように「女性語に対する若い世代の批判行動だ」ととらえる見方もある。『日本語と女』（岩波新書）の中で寿岳章子が紹介している女子中学生の意見「『あたし』などと言っているのは男の子と一対一のつきあいができない」（1978）というのもこれに類する。また近藤純夫も、「先生が女と男を差別するから、私も『男みたいにならなきゃ損だ』と思って『ボク』を使うことにした」という小学6年の少女のことばを紹介している（『女の子と「女ことば」——「女ことば」は、滅びゆくのか』「言語生活」1984. 3）先にあげた投書文の中で、「男言葉」を使う中学生の母親が、その「あまりの品の悪さ、乱暴な口調にあいた口がふさがらない」と言いながらも「単に女の子らしい（？）言葉づかいをしなさいと言っただけではすまないような

気がします。」と歯切れが悪いのも、娘の「男言葉」にそのような批判意識を感じとってのことかと思われる。この投書に対しても実際にすぐに「女性の男言葉は簡単明瞭で解放感、思いやりがあってさわやかだ」という主旨の反論（援護？）がなされた。（1988.3.28 朝日新聞）

このように見ていくと、78年当時、または84年当時、「男ことば」を使うようになった少女たちの中に、「女ことば」やそれに付随して押しつけられる「女らしさ」への抵抗感があったのは明らかだろうし、それが少女の「男ことば」化を押しすすめてきたと言えるだろう。そして「おとなたち」は少女たちのそんな思いを援護し、批判し、少女たちの頭ごしに論をたたかわせてきたという感がある。しかし少女の「男ことば」化が語られるようになってすでに10年以上たつ。「男ことば」は今やすっかり定着して、今回マンガに現れた程度の「男ことば」にはあまり驚く人もいなくなったのではないかと思われる。（俗語・卑語について片桐が述べているように、マンガのことは一般読者を想定しているがゆえに、あまり極端な、内輪にのみ通じるような例は現れないということもあるが）そのような中で、もはやあたりまえのこととして「男ことば」を使っている当の少女たち——女子中高生は「女ことば」への批判意識を持ち続けているといえるのだろうか。マンガに現れる女子中高生のことばを見ると、文末表現についていえば、男性専用・男性らしいと言われる表現に混じって「好きなの」「行くの」「始めちゃってるわよ」「異常よ」「いやだわ」などのような女性がおもに使うとされる表現も決して少なくはない。敬語に関しては丁寧表現を中心に先生・先輩などに対しては明らかに敬語で遇すべきだという意識が見られるし、挨拶語にはかなり丁寧な形のものも現れている。また寿岳や近藤が紹介している自称「ボク」は1登場人物のみ。男性から女性を「おまえ」と呼んでいる例は多いが、逆はない。縮約形も形によっては予想に反して低率でしか現れない。（「～ない」→「～ねえ」など）俗語・卑語についても存外例が少なく、古くから用いられているものが多く、現代の若者ことばとしての特徴が見られるというほどのものはなかった。以上のように見ていくと、マンガにおける女子中高生のことばには意外に保守的な面も残っていることがわかる。彼女

たちはもはや主義として——「女ことば」に抵抗しようという意図を持って——「男ことば」をつかっているわけではなく、相手との関係、話題やその場の状況に応じて、それにふさわしいことばを使いわけようとしている。それが「男ことば」であろうと「女ことば」であろうとこだわらないというところではないだろうか。先の投書の女子中学生が母親に「学校だけでしか使わないから大丈夫」というのも、そんな使いわけの意識の現れと見ることができる。実際に「ふざけんなよー」「（う）るっせえ」などと叫んでいた高校生が、デパートなどに就職して2～3ヶ月もたち母校に現れて、流れるがごとく敬語などを用いて話す変わり身の早さに高校教師はしばしば驚かされたりもするのである。

少女（女子中高生）たちが「女ことば」を使って「女らしく」あるべきだという規範が放たれて「男ことば」も含め使いたいことばを使えるようになったのだとすれば、これはうれしく、楽しいことだ。その上で場に応じて「女ことば」をも使い得るのだとすればこれは少女たちの言語能力の幅がより広がったのだともいえるだろう。（もっともそこまで言えるのかどうかはわからない。敬語——特に尊敬語や謙譲語の「能力」には疑問が残る。）ただ、実際にどのような場でどのような表現を選ぶのかということは、結局ことばの使い手がどのような人生や人間関係を選んで生きるのかという意識の問題である。「能力」としての「女ことば」を弱者の強者に対する媚としてのみ使うとすれば、「能力」の拡大は必ずしも自由の拡大にはつながらないだろう。その意味で女子中高生が今後成長して社会人となったときどのようなことばを使うようになるのかは彼女たちの選ぶ生き方によるだろうし、また社会が女性たちに、一人の自立した人間として他者と対等な関係を結んで生きる可能性をどれほど与えるかによって、決まってくるのであらうと考えられる。